子ども用

伝道地便り

２０１９年 第１期　南アフリカ・インド洋支部

第1話「野菜だけをお願いします」	ボツワナ
第2話「ウナが見た夢（正夢）」	ボツワナ
第3話「水をかぶるのを拒否した少女」	モザンビーク
第4話「ジェレミアスための家」	モザンビーク
第5話「テレビのチャンネル争い」	サントメ・プリンシペ
第6話「神様は素晴らしいものを造られます」	サントメ・プリンシペ

ADVENTIST MISSION

セブンスデー・アドベンチスト教団　伝道局　安息日学校部

伝道地便りの用い方のヒント

伝道地便りに収められているのは、現地からの一人ひとりの生きた経験です。安息日学校でこれを用いるときには、生き生きとご紹介していただきたいのです。そのためのヒントを、いくつか列挙いたします。

1）前もって何度か目を通し、自信を持って読む。

2）棒読みは避け、証されている大事な部分を明確にしておく。

3）伝える時間はできるだけ短く。長くても5～7分。

4）誰が、いつ、どこで、何を、なぜ、どうしたかが分かるようにする。

5）できたらカードに文字や絵を書くなどの視聴覚的工夫を。

6）時には、スキット（寸劇）風にしてくださっても良いですね。

伝道地便りは、私たちが自分の証をするときの練習になります。
主の愛の証のために、「心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くして」
紹介しましょう。

１．野菜だけをお願いします　　ボツワナ

ジョアナ・レチーア　６歳

６歳のジョアナは、お母さんが出してくれた夕ご飯を見て、鼻にしわを寄せました。

「お肉はいらないわ！　賢くなりたいの。」

お母さんはびっくりしました。ボツワナの伝統的な料理をお母さんは一生懸命作って用意したからです。ビーフシチュー、トウモロコシで作ったマッシュポテトのような「パリチー」、豆の葉っぱとトマト、玉ねぎを、少しの油と塩で味付けした、「モロコ・ワ・ディンアワ」が、食卓に並んでいました。

お母さんは考えました。

「学校で、お肉は良くないって言われたの？」

「そうなの。先生にそう言われたの。牧師先生が、間違った物は食べないようにって。正しい食べ物を食べたら賢くなれるって。」

お母さんはさらに質問をして、ジョアナの通っているイースタン・ゲート小学校で、祈祷週が始まったことを知りました。この祈祷週のテーマはダニエルで、学校の牧師先生が、ダニエルと三人の友人たちが、バビロンのネブカドネツァル王の宮殿で、肉を食べなかった話をしていました。彼らは野菜を食べて、賢く、強い青年になったのでした。

ジョアナはビーフシチューを指さしながら言いました。「これ、食べないほうがいいのよ。野菜だけを食べたいの。ダニエルみたいに賢くなりたいから。」

お母さんは恥ずかしくて真っ赤になりました。肉より野菜の方が健康的だと知っていたからです。でも、ジョアナが学校で正しい食べ物について学んでいることを知って嬉しくも思いました。

「わかったわ。牧師先生が教えてくださったことを神様に感謝しましょうね。これからはちゃんと健康に良い食べ物を料理するように頑張るわ」とお母さんは言いました。

ジョアナは夕食のトウモロコシのマッシュと豆の葉っぱを喜んで食べました。ビーフシチューには手を付けませんでした。

次の日、食事の支度をするためにキッチンに入ったお母さんは、肉を食べたくないというジョアナの願いを思い出しました。そこで、お父さんと、ジョアナの 16 歳のお兄さんに、ジョアナが祈祷週でダニエルのことを学んでいる間、食事に肉を出さないと言いました。ジョアナのお兄さんはブツブツ言いましたが、最後には、野菜を食べることに賛成しました。

ジョアナはとても喜びました。毎晩ジョアナは野菜を中心に食べ、肉は食べませんでした。祈祷週から９か月が過ぎましたが、ジョアナは今も野菜を喜んで食べています。そしてお母さんは、肉を使わない健康的な料理を作ろうと頑張っています。

ジョアナは、ダニエルの模範に従うことを決めてよかったと思っています。

「野菜を食べると、賢く、強くなれるのよ。」ジョアナはニコニコしながら言っています。

そして校長のレケザニ・ムポフ先生も、同じように思っています。ジョアナは今クラスでト

ップの成績を取っていて、それは正しい食べ物と、神様がそれに応えてくださると信じる信仰のおかげだと先生は思っています。

校長先生は言います。「ジョアナは賢くて、お行儀がよく、素直な子です。そして、教わったことをよく覚えているのです。」

お母さんのベシー・レチーナも喜んでいます。

「体に良い食事について聞いてはいましたが、実行していませんでした。子どもから正しいことを言われるのは耳が痛いものです。学校で正しいことを教えてくれて嬉しいです。」

2015 年の 4 期の 13 回献金は、ジョアナの通っているイースタン・ゲート小学校を建てる資金になりました。小学校は 2017 年 1 月に開学しました。これはボツワナ国内では 3 つ目、ボツワナ北部では初めてのセブンスデー・アドベンチストの小学校です。みなさんの献金を感謝します。

bit.ly/Joanna-Lechina で、ジョアナの動画が見られます。写真は bit.ly/fb-mq で見られます。

宣教メモ

- マカディカディ塩湖は、12,000 平方メートルの広さのある、世界最大級の塩の湖です。気候はとても暑く、雨はほとんど降りません。けれどもいったん雨が降ると、塩湖は青い湖となり、フラミンゴなどの様々な動物がやってきます。

２．ウナが見た夢（正夢）　ボツワナ

ウナバツショ・セルツ　18 歳

ウナバツショ・セルツは、友だちにウナと呼ばれています。ウナは、新しく行くことになったボツワナの学校に制服を取りに行く前の晩、おかしな夢を見ました。

16 歳のウナは夢の中で、ある日の午後、誰かと外でおしゃべりをしていました。それから建物の中に入ってバプテスマを受けたのです。

ウナははっとして目を覚ましました。ウナは教会に行っていなかったので、なぜバプテスマを受けることになったのかわかりませんでした。

そのうち夢のことは忘れてしまいました。

「他の夢と同じように単なる夢として気に留めませんでした」とウナは言います。

ウナは、両親と二人の姉妹と一緒に、ボツワナの隣国、ジンバブエに４年間住んでいました。そして毎年違う学校に転校していました。しかし、ウナはボツワナに帰りたいと思っていたので、ボツワナ第２の都市、フランシスタウンにあるイースタン・ゲート高校という全寮制の学校に行きたいか両親に聞かれたとき、すぐに「行きたい」と答えました。フランシスタウンの近くに家がありましたが、ウナは学校の寮に入ることにしました。

夢を見た翌日、ウナと両親は制服を受け取るためにイースタン・ゲート高校に行きました。そしてウナは寮に入り、両親はジンバブエに戻りました。お父さんはジンバブエの首都ハラレで、国際的な警察機関で働いていたのです。

ウナは最初、自分がセブンスデー・アドベンチストの学校にいることに気づいていませんでした。ですから朝の礼拝に出るように言われたとき、驚きました。朝早く起きることが最初は嫌でしたが、礼拝の話を聞くうちに、イエス様に対する興味がわいてきました。そして学校で過ごしていく中で、イエス様への愛が少しずつ育っていきました。

ある安息日、高校の牧師先生が、バプテスマの希望者はいませんかと聞いたとき、ウナは前に進み出ました。ウナはバプテスマクラスの学びを終え、数十人の仲間達と安息日の午後にバプテスマを受けるのを待っていました。

バプテスマの当日、ウナはいつものように教会に出席して、学校の食堂でお昼ご飯を食べました。その後、彼は外に出て寮の近くで女の子とおしゃべりをしました。話しているとき、今の状況に覚えがあるような気がしてきました。

「でもそれが何であるのかわかりませんでした。ですから、気にしないことにしました」とウナは言っています。

その後まもなく、生徒たちはバスに乗って、バプテスマ式のための教会に向かいました。

「教会に着いたとき、建物の入り口に見覚えがあるような気がしました。でもそこに来たのは初めてだったのです。」

ウナはどういうことかと不思議に思って、同じような既視感（実際には見ていないのに、かつて見たことがあると感じること）を感じるか友だちに聞きましたが、友だちは不思議そうな

顔をして彼を見つめ、首を振りました。

バプテスマを受ける人たちは、教会の後ろの方でガウンに着替えるよう言われました。ウナがバプテスマ漕に入っていったとき、その階段に見覚えがあるような気がしました。そのあとすぐ牧師がお祈りをし、彼は水の中に沈められました。

水から上がり、顔を水が流れ落ちていったとき、ウナは突然、前に見た夢を思い出しました。その日の午後起こったことはすべて夢で見たことでした。彼は信じられない気持ちになりました。

「神様は不思議な方法で働かれます。私は自分のバプテスマを前もって見ることができて幸運でした。あれから、私の信仰は強くなり、聖書にもっと真剣に向き合うようになりました。」

ウナは他の生徒たちにも、彼の夢について話しました。夢に出たことを聞いた女の子はとても驚きました。

「神様がくださるものに感謝しないとね。」と彼女は言いました。

ウナの両親もまた驚きました。夢のおかげで、ウナは両親に学校でイエス様について教わっていることを話すことができました。

現在、ウナは 18 歳で、両親に毎週安息日に教会に行くようにと勧めています。高校を卒業したらコンピューター（モバイル・コンピューティング）の勉強をしたいと思っています。何をすることになったとしても、ウナはイエス様を第一にすることを決めています。

「あの夢は私に、人生において選ぶべき道と、その 1 つしかない道、キリストから離れないようにと教えてくれました」とウナは言っています。

2017 年 1 月に開学したイースタン・ゲート高校は、イースタン・ゲート小学校と同じキャンパス内にあります。この学校を立てることを可能にしてくださったみなさんの 13 回献金に感謝します。

〈お話のヒント〉

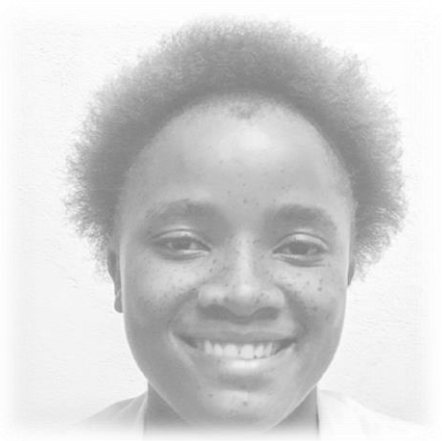
・地図でジンバブエのハラレを見つけましょう。子どもたちに、ウナが家族とどれだけの距離を離れて暮らしていたか示してください。

・子どもたちに、聖書の中に出てくる、神様から夢を見せてもらった人を挙げさせてください。ヤコブの天のはしごの夢、ヨセフの麦の束や月と星の夢、ネブカドネツァルの像の夢など。

・子どもたちに、神様はなぜ夢を通して人々に語られるかを尋ねてください。理由には、信仰を強めるため（ヤコブやウナの場合）、未来のことを教えるため（ネブカドネツァルの場合）などがあげられます。

bit.ly/Unabatsho-Sertse で、ウナの動画が見られます。写真は bit.ly/fb-mq で見られます。

３．水をかぶるのを拒否した少女　モザンビーク



イゾールティーナ・アーナルド・ホモ　19 歳

おじさんは困っていました。モザンビークのマシシェで働いていましたが、困ったことがたくさんあり、なぜ何もかも上手くいかないのかと思っていました。そこでおじさんは、まじない師のところに行って、その理由を聞こうとしました。

まじない師は、それはおじいさんのせいだと言いました。

まじない師は、もう何年も前に亡くなったおじいさんが、自分の骨をお墓から家族の家に移してほしいと思っている、と言いました。それから、親戚を集めて、特別な儀式をしなければならない。そうすれば、おじいさんはもうおじさんに悪いことをしなくなり、仕事での問題も無くなる、とまじない師は言いました。

おじさんは、甥やその他の親戚を集めて、みんなでシャベルを持っておじいさんのお墓に行きました。おじいさんはモザンビークの内戦で亡くなって、他人の庭に埋められていました。

おじさんは一生懸命掘りましたが、おじいさんの骨は見つかりませんでした。ついにおじさんはあきらめて、骨が無いままで儀式を続けることにしました。

おじさんの姪で 19 歳のイゾールティーナは、「それで家族は、骨が家に無い中で儀式を行うことになりました。」と言っています。

イゾールティーナは家族の中で一番の年下で、その儀式に出席するのは許されませんでした。しかし両親から、その儀式の最後の部分には参加するように言われました。それは水を使った特別な儀式で、バケツに水と枯葉、小枝を入れ、それを体にかけるというものです。まじない師によると、水をかぶったら家族全員がこれからもおじいさんから守られるということでした。

けれどもイゾールティーナは、その水はかぶらないと言いました。彼女は、通っているモザンビークのアドベンチスト大学でバプテスマを受けたばかりで、その儀式は無意味だと思いました。

お母さんは激怒しました。

そして、「あの特別な水をかぶらないと、あなたに何か悪いことが起こるよ。そうなってもお母さんは知らないよ」と言いました。

イゾールティーナは心配しませんでした。なぜなら学校で、死んだ人は生きている人に何もできないということを教わっていたからです。コヘレトの言葉 9：5～6 に、「生きているものは、少なくとも知っている／自分はやがて死ぬ、ということを。しかし、死者はもう何ひとつ知らない。（中略）太陽の下に起こることのどれひとつにも／もう何のかかわりもない。」とあります。

「死者がまだ生きているという考えは間違っています。聖書は、死者は何も知らないと教えています。死とは深い眠りのようなものです。それに、水をかぶることで何かから守られるというのはあり得ません。人を守ることができるのは神様だけなのです」と彼女は言いました。

水をかぶらなかったことで、実際イゾールテ

ィーナに悪いことが起こりました。家族が、もうモザンビーク・アドベンチスト大学の学費を払わないと言ったのです。大学は彼女の家のあるベイラから車で９時間のところにありました。家族は彼女に、学費を払えないと大学の寮を追い出されて、最後にはホームレスになると警告しました。

イゾールティーナは勉強を続けるためのお金をどうやって手に入れたらよいのかわかりませんでしたが、神様に助けてくださいとお祈りしました。また、クラスの友達や先生たちに、家族が学費を払わないと言ったことを話しました。

学費を納めるときが来ましたが、大学の学長はイゾールティーナに心配しなくて大丈夫だと言いました。大学が、授業料分の奨学金を出すことにしたからです。また、同じ大学で学んでいる夫婦が、彼らの家にただで住まわせてくれることになりました。

すぐにイゾールティーナは、大学に残る道を与えてくださった神様に感謝しました。

今、イゾールティーナは大学の２年目を終えるところです。今までの人生には大変なこともありましたが、そのうちのどれ１つとして、おじいさんのせいだとは思っていません。

「私に起こった悪いことは、どれも私の死んだおじいさんのせいではありません。それは私に教訓を与えるために起こっただけです。試練に合うと、私たちの信仰は成長します。私の信仰はとても成長しました。」

今期の 13 回献金の一部は、モザンビーク・アドベンチスト大学がもっと発展して、イゾールティーナのような生徒たちが勉強できるようになるために使われます。みなさんの献金を感謝します。

〈お話のヒント〉

・子どもたちに、メディアや家庭でどんなことを教わっていても、死者は眠っているだけで、私たちの生活に関わることはないと強調してください。

bit.ly/Isaltina-Homo で、イゾールティーナの動画が見られます。写真は bit.ly/fb-mq で見られます。

４．ジェレミアスのための家　モザンビーク

ジェレミアス・リゴリオ　20 歳

ジェレミアスは、ナンプラという、モザンビークの大都市に住んでいました。17 歳のとき、近所に住んでいた 18 歳の友だちが、セブンスデー・アドベンチストの教会に誘ってくれました。

「一緒に行こう。座って聖書の話が聞けるよ。」

ジェレミアスは話が気に入りました。すると、次の日の夕方も話があると言われました。その教会では伝道講演会が開かれていたのです。

ジェレミアスは毎晩教会に通い、金曜日の夕方に聞いた最後の話で、第七日安息日について学びました。説教者はお話を聞いていた人たちに、イエス様に心を捧げるようにと勧め、ヨハネによる黙示録３：20 を読みました。イエス様が、「見よ、わたしは戸口に立って、たたいている。だれかわたしの声を聞いて戸を開ける者があれば、わたしは中に入ってその者と共に食事をし、彼もまた、わたしと共に食事をするであろう」と言われている箇所です。

このメッセージはジェレミアスの心をとらえ、彼はこう考えました。「イエス様を拒むことなんてできない。ぼくの心に入っていただこう。」

友だちは安息日に教会に行こうと、ジェレミアスを誘いました。そしてジェレミアスは丸一日教会で過ごしました。彼は次の安息日にも教会に行きました。しかし、次の安息日に、お母さんの具合が悪くなってしまいました。お母さんは病院で女の子の赤ちゃんを出産したのですが、良くなりませんでした。ずっと「頭が痛い、頭が痛い」と言っていました。

お母さんが良くならないので、お母さんの夫（ジェレミアスの義父）は、お母さんを病院から退院させ、モザンビークの森にいるまじない師に見てもらうことにしました。ジェレミアスはお母さん、義理のお父さん、生まれたばかりの妹と一緒に、人里離れたたその村で１か月過ごしました。間もなくお母さんが亡くなりました。その１週間後、赤ちゃんも亡くなってしまいました。

ジェレミスの義理のお父さんは、一人でナンプラに戻ることにしました。

「私はお前とは一緒に暮らしたくない。お前は私の家族ではないから」とお父さんは言いました。

ジェレミアスの人生が崩壊しました。どうしたら良いかわかりません。しかし、神様に祈った後、心に平安を感じました。自分もナンプラに戻って、部屋をさがすことにしました。

それからの３か月間、ジェレミアスは雑用をしながら、稼いだお金で部屋代を払いました。

そして安息日には教会に行きました。最初に彼を教会に誘ってくれた友だちが、食べ物を提供してくれました。そのほかに教会員の人たちは、お金をくれました。

「それからぼくは、教会でバプテスマの準備をしているのを見た時、『今がバプテスマを受ける良い機会だ！』と思ったのです。」

しかし、バプテスマを受けた直後から、ジェレミアスの生活はよりいっそう厳しくなりま

した。部屋代を払うための仕事がなくなったのです。雨の多い季節になり、屋根からは雨漏りがしてきました。部屋に泥棒が入り、持ち物が全て盗まれてしまいました。少ししかなかった食べ物も持っていかれてしまいました。

「バプテスマの後、大変なことが沢山起こりました。このときぼくは、どのように祈り続けるかを学びました。神様に、『生活していく方法が見つかるように助けてください』と祈りました」とジェレミアスは言います。

ある日、教会の牧師先生がジェレミアスに、教会の計画で、土地の一角に小さな家を建てることになったことを伝えました。それがジェレミアスの家なるというのです。

ジェレミアスは一生懸命働いて、その家を建てるためのお金を稼ぎました。足りない分は教会が出してくれました。そして彼は、家を建てる作業も一緒にやりました。

現在、ジェレミアスは20歳で、その小さな家に住んでいます。安息日には、ほんの何歩か歩くだけで教会に行くことができます。中学1年生までしか学校に行けてないジェレミアスは、高校に進学したいという希望を持ちながら今も仕事を続けています。

「ぼくは、お腹がすくことや、恥ずかしい思いをすること、その他沢山の困難に出会ってきました。しかしぼくはそれらに打ち勝ってきました。神様がぼくのそばにいてくださったからです。今のぼくがあるのは、教会の皆さんが私を助けてくださったおかげです。」

そんなジェレミアスに、困難の中にある人たちへのアドバイスを聞きました。

「まず神様を第一にすることです。そうすれば困難に打ち勝つことができます。ぼくよりも大きな困難に直面する人がいても、神様があなたの手を握っていてくださいます。ぼくの手をしっかり握っていてくださるのと同じように。」

ジェレミアスは、イエス様が心の扉（とびら）を叩いてくださっている音に気づくことができて良かったと思っています。

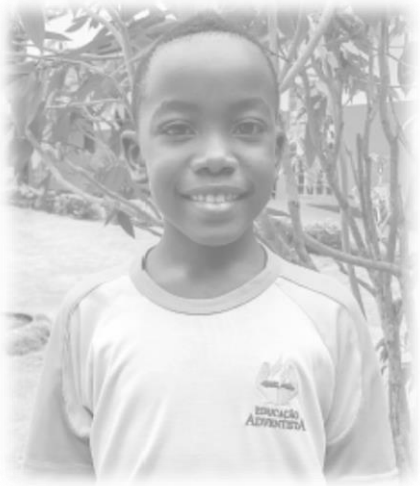
今期の13回献金の一部は、ジェレミアスの住んでいるナンプラに、エイズで親を亡くした子どもたちのための孤児院を作るために使われます。みなさんの献金を感謝します。

〈お話のヒント〉

・黙示録３：20－21を読んで聞かせ、子どもたちに、心の扉（とびら）を開けてイエス様を迎えるようにと勧めてください。

ジェレミアスの動画はbit.ly/Jeremias-Ligorioで見られます。写真はbit.ly/fb-mqで見られます。

５．テレビのチャンネル争い　サントメ・プリンシペ



アンセルモ・バロス　８歳

アンセルモは、西アフリカの島国、サントメ・プリンシペの首都のサントメに住んでいます。テレビのチャンネル争いは、アンセルモがスーパーヒーローのアニメを見たいと思った時に始まりました。

お姉さんのエリーンは、テレビでプリンセスの出てくる番組を見たいと思っていました。

「ぼくが先に見ていたんだよ。」とアンセルモはお姉さんに言いました。

「だからなに？　私の方が年上なのよ」とエリーンは答えました。

アンセルモはその言葉に怒りました。お姉さんの方が年上なのは、どうすることも出来なかったからです。だから自分なりにできることをやりました。腕をビシッと叩いたのです。

「なにするのよ！」叩かれるのが大嫌いなエリーンは、叩き返しました。叩かれるとアンセルモはもっと腹が立って、また叩き返しました。

こうして二人は叩きあい、わめき声がどんどん大きくなりました。騒ぎを聞いてお母さんが部屋にやってきました。

「もうやめなさい！」お母さんは怒って言いました。「いつかけがをしますよ。けんかはいけません。」

お母さんは子どもたちに、順番にテレビを見るように言いました。アンセルモがアニメを最後まで見て、それからエリーンが自分の見たかった番組を見ました。

アンセルモはお姉さんと喧嘩をしたくありませんでした。お母さんに言われたことを守りたいと本当に思っていたのです。しかしすぐに、エリーンが嫌なことを言ってきました。それで思わずまた腕を叩いてしまいました。

ある日、アンセルモはテレビでセブンスデー・アドベンチストの学校の宣伝を見ました。彼はその学校案内の宣伝が気に入り、この学校に行けばよいお友だちが作れるだろうと思いました。そこで両親に、この学校で勉強したいと言いました。

石油関係の会社で働いているお父さんは、「もしもお金の都合がついたら行かせてあげるよ」と言いました。

お父さんはお金の都合をつけて、３年生のアンセルモをその学校に行かせてくれました。その学校は今まで通っていた公立の学校とは違っていました。公立の先生たちは全員がサントメ出身で、アンセルモが何か悪いことをすると叩くことがありましたが、新しい先生たちは決して叩きませんでした。そして、先生たちの中にはブラジルやポルトガルから来た宣教師もいました。

近所に住んでいる友だちが二人、その学校に通っていることがわかりました。おかげで気持ちが楽になりました。

毎朝先生は授業の前に聖書の物語を読んでくれました。

アンセルモはそれまで一度もイエス様について聞いたり、聖書を読んだりしたことがあり

ませんでした。しかし、聖書のお話を聞くことが大好きになりました。先生が、ヨセフがお兄さんたちと言い争った場面を読んだとき、アンセルモはお姉さんとのけんかのことを思い出しました。ヨセフのお兄さんたちがとても腹を立てて、ヨセフを奴隷としてエジプトに売ってしまった場面も聞きました。最後にヨセフがお兄さんたちを赦したときに、本当によかったと思いました。

「このお話で一番好きなのは、ヨセフが総理大臣になって、お兄さんたちを食事に招待して赦したところです」とアンセルモは言います。

アンセルモはその日学校から帰ると、お姉さんにヨセフについて話しました。

「その日から、お姉さんは僕を叩いていません。そしてぼくもお姉さんを叩きません」とアンセルモは言っています。

今期の 13 回献金の一部は、アンセルモの通う国際アドベンチスト・カレッジに、新しい講堂を建てるために使われます。その講堂では全校生徒が朝の礼拝をし、神様についてもっと知ることになるでしょう。

「前は、神様について何もわからなかったし、いるかどうかも知りませんでした」と、4年生になったアンセルモは言います。「でもこの学校で、神様は愛のお方で、ぼくにとってとても大切な人だということを教えてもらいました。」

みなさんの 13 回献金を感謝します。

〈お話のヒント〉

・アンセルモのフルネームは、アンセルモ・ボンフィム・ソウサ・バロスです。ポルトガル語の名前は、つけてもらった自分の名前といくつかの名字との組み合わせになっています。最初の名字はお母さん側の名字で、最後の名字はお父さん側の名字です。普段は自分の名前と最後の名字だけを使います。

アンセルモの動画は bit.ly/Anselmo-Barros で見られます。写真は bit.ly/fb-mq で見られます。

宣教メモ

・サントメ島におけるアドベンチストの働きは、ポルトガル人の文書伝道者ホセ・フレーレによって、1936 年に始められました。1938 年に彼は伝道者となり、1939 年2月に、最初のバプテスマが行われました。

６．　神様は素晴らしいものを造られます

サントメ・プリンシペ

ダディスラウ・サクラメント　９歳

ダディスラウは、近所の子どもたちに悪口を言われるのが嫌でした。

ある日、家の外を歩いていると、男の子が大声で「デブ！」と言ってきました。ダディスラウは走って行ってその子を殴りました。

また別のときは、女の子がバカにしたように、「あんた、かっこわるいよね。」と言ってきました。ダディスラウは手を上げて、その子をバシッと叩きました。そして「ぼくは太ってない！　かっこわるくもない！」と周りの子どもたちに言いました。

ある日、ダディスラウはついにやり過ぎました。男の子がまた悪口を言ってきたとき、大きな石を拾って力いっぱい投げつけてしまったのです。その石は男の子の手に当たり、その子は泣きながら走って帰りました。

その夜、その男の子のお父さんがダディスラウの家にやってきて、お父さんとお母さんにダディスラウが石を投げたことを話しました。ダディスラウのお父さんは大きな木のスプーンを持ってきて、ダディスラウの手を思いっきり叩きました。

「石を投げちゃだめだ。誰かに意地悪されても無視して、気にするな。石を投げたらまた叩くからな」とお父さんは言いました。

ダディスラウはわんわん泣きました。意地悪された自分が怒られるなんて、こんなひどいことはないと思ったのです。ただ、もう石は投げないことにしました。また男の子が悪口を言ってきたとき、腹が立ってこぶしをぐっと握りました。本当は殴ってやりたいと思ったのですが、そのままその場所を離れました。お父さんにまたあの大きな木のスプーンを持ち出してほしくなかったからです。

ダディスラウが３年生になったとき、お父さんとお母さんは彼をセブンスデー・アドベンチストの学校に入れました。今までイエス様について聞いたことも、聖書を読んだこともありませんでしたが、聖書のお話を聞いたり読んだりすることがとても好きになりました。一番好きだったのは、イエス様のお話を読むことでした。

「イエス様が十字架にかかって、よみがえって、天国に帰って行ったこと、そして今、良い子たちを迎えにくるために待っておられることを学校で教わりました」と、ダディスラウは言っています。彼は学校で２年学び、今は９歳。４年生になりました。

一番好きな聖書の場面は、イエス様が弟子たちに、自分は天国に行くけれどもまた迎えに来ると話したところです。イエス様はこう言われました。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。わたしの父の家には住む所がたくさんある。もしなければ、あなたがたのために場所を用意しに行くと言ったであろうか。行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわ

たしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる。」

「このお話が好きなのは、ぼくも天国に行きたいからです。天国で神様に会いたいです。天国を見るのも楽しみです」とダディスラウは言います。

ダディスラウのお父さんとお母さんは、ダディスラウの行動が変わったことに気づきました。彼が学校でイエス様について学んでいることを嬉しく思っています。そして今は6歳の妹も同じ学校で学んでいます。

学校でダディスラウは、他の子どもたちが嫌なことをしてきても怒らなくてもよいことを学びました。

「誰かが悪いことを言ってきても、無視しています。何も言わないで、そのまま歩き続けます。何を言われても気にしません。だって、その子たちは間違っているんです。ぼくはかっこいいんです。学校で、神様がぼくを造ってくださったこと、神様は良いものしか造られないことを学んだので、それがわかりました。」

今期の 13 回献金の一部は、ダディスラウの通う国際アドベンチスト・カレッジに、新しい講堂を建てるために使われます。その講堂では全校生徒が朝の礼拝をし、神様についてもっと知ることになるでしょう。

〈お話のヒント〉

・地図で、サントメを探してください。

bit.ly/Dadyslau-Sacramento で、ダディスラウの動画が見られます。写真は bit.ly/fb-mq で見られます。

宣教メモ

・カカオ豆はこの島国の主要な作物で、輸出品の 95 パーセントはこのカカオ豆です。それ以外に輸出されている作物は、ヤシ油の原料、ヤシの種、そしてコーヒーです。

・サントメ・プリンシペの食事は熱帯地方の根菜類、バナナ、そして魚です。野菜はその土地固有の青菜がほとんどで、赤いヤシの油で調理されます。